

香港の初等教育機関における日本語教育の導入のための提言
—日本語を必修科目として取り入れている小学校の事例から得た示唆—
A Proposal to Introduce Japanese Language Education in Primary Schools
in Hong Kong: A case study of a Primary School with Japanese Language
as a Compulsory Subject

宮崎 紀子

要旨

国際交流基金（2011）の調査によると香港の初等教育機関では、2003 年より正規科目としての日本語学習が始まり、2012 年 3 月時点で 7 校での実施が確認されている。本研究の目的は、必修科目として 2004 年より日本語教育を実施している小学校の事例を調査し、分析することで香港のより多くの小学校において日本語教育を導入するための提案を行うことである。調査対象校が日本語教育の実施を継続できた要因は①新設校であるため新しいことが導入できた②日本語の基礎能力のある教師が在籍している③系列の中学校でも継続して日本語を必修科目として学ぶことができることの3点が挙げられる。小学校における一つの望ましい日本語教師像は香港の教員資格を持ち、日本語能力試験 N5 に合格していることという示唆が得られた。現役の或いは将来の小学校教師への日本語教育及び教授法の指導が必須の課題であると考えられる。

キーワード：

海外での日本語教育、初等教育、第四言語としての日本語、日本語教師養成

香港の初等教育機関における日本語教育の導入のための提言 —日本語を必修科目として取り入れている小学校の事例から得た示唆—

宮崎 紀子

1. はじめに

国際交流基金(2009)の報告では、香港の日本語学習者数は 28,224 人で世界第 9 位、教師数が 734 人で、機関数では 78 校が確認されている。日本語学習の場は民間の語学学校が主流で、全体の 7 割に達している。国際交流基金¹(2011)によると香港の初等教育機関においては、2003 年より正規科目として日本語教育が始まった。²宮崎(2009)の調査では、2007 年の時点で正規科目や課外活動などとして日本語を教えている初等教育機関は 20 数校であり、³2008 年時点で正規必修科目として日本語科目を導入している小学校は 1 校であった。⁴2012 年 3 月時点では、正規科目として 7 校での実施が認められているが、その正確な数は確認できていない。⁵このように、香港においては小学生を対象にした日本語教育が積極的に行われてきたとは言い難く、また、香港の全ての初等教育機関を対象とした包括的な調査も行われてこなかったのが現状である。そのような状況の中、調査対象校である小学校は 2004 年から小学 6 年生を対象に、必修科目として日本語を取り入れている。2002 年秋から同じく必修科目として日本語教育を実施している中学校とは小中一貫校を成している小学校である。

本研究の目的は、必修科目として日本語教育を実施している小学校の事例を調査し、

-
- 1 国際交流基金『日本語教育機関調査：2009 年海外の日本語教育の現状』
<<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/result/index.html>>(2012 年 10 月 24 日)
 - 2 国際交流基金「日本語教育国・地域別情報<香港>」
<<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2011/hongkong.html#JISSHI>>
(2012 年 10 月 24 日)
 - 3 2007 年 9 月 6 日香港日本語教育研究会事務局次長(当時)葉偉然氏への聞き取り
 - 4 宮崎紀子(2009)「香港の初等教育における日本語教育の現状—小学校と語学学校との比較を通して」『アジア太平洋地域における日本語教育』第 8 回国際日本研究・日本語教育シンポジウム
実行委員会：189
 - 5 国際交流基金「日本語教育国・地域別情報<香港>」
<<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2011/hongkong.html#JISSHI>>

分析することで香港のより多くの小学校において日本語教育を導入するための提案を行うことである。そのために、以下の方法で調査を行った。

2. 調査の方法

①調査対象校の小学校校長への対面式、電子メールでの聞き取り調査；②調査対象校の小学校の日本語科講師への対面式、電子メールでの聞き取り調査；③一貫校である中学校の校長への対面式聞き取り調査④調査対象校の小学校日本語科講師へのアンケート調査；⑤調査対象校の小学校の日本語科講師からのコース関連資料の収集；⑥調査対象校の小学校の日本語授業の参与観察；⑦先行研究、メディア、関連書籍の参照

3. 調査対象の小学校の概要^{6 7 8}

3.1 設立年：

2001年9月

3.2 設立地区：

香港新界西部の元朗地区⁹

6 学校案内「順徳聯誼總會伍冕端小學 S.T.F.A Wu Mien Tuen Primary School The 10th ANNIVERSARY 2001-2010」：28-29

7 2011年7月15日 アンケート調査票の回収。回答者は日本語担当の馬南教諭。

8 2011年12月13日に日本語担当の馬南教諭への聞き取り調査を行い、学校案内や日本語コースの詳細について資料の提供を受けた。

9 新界西部の元朗地区について：天水圍は香港の新界の元朗区の西北にあり、「屏山郷事委員會」に属する「沙江圍」、「馮家圍」、「輞井村」、「蝦尾新村」などの村落に囲まれている。「屏山郷事委員會」は植民地時代からある新界の村落「諮問機構」である。政府はこの組織を通して、地元の人と意思相通し地方政治の円滑を図っている。香港の中心地セントラルから約25キロこの「天水圍ニュータウン」は人口が25万を超えている。

3.3 校訓：

「文、行、忠、信」¹⁰

3.4 学校の特色：

学校案内の資料¹¹から2点について学校の特色を記す。

1. 学びと教え

1	Johns Hopkins University の Alphonics' s Lagoon Phonics and Reading Program を導入し、生徒の英語力を強化した
2	児童の外国語学習の「臨界期」(critical period) ¹² と児童言語習得(child language acquisition)理論を活用しながら、香港で初めて小学校の学習カリキュラムに日本語教育を取り入れた
3	教師のOJT(On the Job Training)を奨励し、教師の半数以上が修士号を取得している

2. 学生の学習成果

1	市民教育 ¹³ 、国民のアイデンティティー教育 ¹⁴ を行っている
2	香港の学力試験において、科目の一部は模擬試験 ¹⁵ で平均点を上回っている
3	香港内の各種学校間コンテスト ¹⁶ では41のコンテストの内、34項目において受賞している

10 この「文、行、忠、信」は孔子の『論語・述而篇』から来た言葉である。文：知識、行：行儀、忠：責任感、信：誠(まこと)を意味する。

11 2011年12月13日に日本語担当の馬南教諭への聞き取り調査を行い、学校案内や日本語コースの詳細について資料の提供を受けた。

12 臨界期仮説(Critical Period Hypothesis)によると人には言語を自然に、かつ努力せずに習得することが出来る期間があるが、一定の年齢に達すると、このような方法ではもはや脳がインプットを処理できなくなる。臨界期がいつ終わるかについては、研究者間で意見が分かれている。

13 「市民教育」とは日本の道徳教育に相応する。

14 「国民のアイデンティティー教育」というのは国民教育のことである。肝心なのは中国人として祖国中国をどう見るかということ、つまり「愛国主義教育」と言える。

15 「模擬試験」とは各小学校の学力評価のための試験である。香港では小学校から中学校へ進学する際に日本の大学入試センター試験のような一斉試験はないので、その学校の生徒の学力を評価するため、各小学校からランダムに選ばれた一定数の生徒にその学校の代表として「模擬試験」を受けさせる。得られた成績はその生徒とは関係はないが、その学校の成績評価になる。

16 香港の中学校間での陸上スポーツ大会や朗読コンテストなど。

宮崎 紀子：香港の初等教育機関における日本語教育の導入のための提言
 —日本語を必修科目として取り入れている小学校の事例から得た示唆—

対象校は 2002 年から必修科目として日本語教育を行っている中学校と小中一貫校を成している。希望者は全員系列の中学校に進学でき、毎年の進学率は 85—90%程度である。

3.5 学生数：

2011—2012 年度は、1 年生から 6 年生まで 889 人が在籍している。

3.6 年間サイクル数：

5 日を 1 サイクルとし、年間 42 サイクルである。¹⁷

3.7 教師について：

教師は 3 人で、学校の内部講師が他の科目と兼任で日本語科目を担当している。授業時間数としては 3 人とも日本語よりも兼任科目を教えている時間の方が長い。¹⁸

	A 講師	B 講師	C 講師
母語	広東語	広東語	広東語
兼任科目	中文（国語）	英語	数学
日本語学習経験	香港の大学在学中に、選択科目として履修	香港の大学在学中に、選択科目として履修	香港の大学の専攻進修学院で学習
日本への留学経験	留学経験はないが、大学時代に日本への 1 ヶ月間のホームステイプログラムに参加	なし	なし
訪日経験	親戚が東京に住んでいるため、過去に 10 日間くらいの日程で 6 回日本へ行っている	日本へは 10 日間くらいの日程で、過去に 5～6 回ほど訪れている	日本へは 10 日間くらいの日程で、過去に 5～6 回ほど訪れている
日本語能力試験	旧 2 級に合格	旧 3 級に合格	旧 4 級に合格

17 香港の小中学校では曜日で時間割を設定しているところの他に、5 日や 7 日を授業スケジュールの 1 単位としているところがある。

18 2011 年 12 月 13 日に日本語担当の馬南教諭への聞き取り調査を行い、学校案内や日本語コースの詳細について資料の提供を受けた。

4. 日本語を必修科目として取り入れた理由—校長への聞き取り調査から^{19 20}

小学校6年生を対象に日本語を必修科目として導入した理由を校長に聞き取り調査を行い、次の回答を得た。

1. 日本語をカリキュラムに取り入れた理由

1	北京語、英語のほか、もう一つの言語を学習する機会を与えたい
2	日本はアジアにおいて、中国の隣国であり、日中両国間のビジネスの可能性が高い
3	最初はもう一つの言語としてドイツ語、フランス語、日本語を考えたが、最終的に日本語を選択した。理由は香港において日本語はより重要で、言語的地位が高いからである
4	若い生徒は皆日本の歌を聞いたり、日本のサブカルチャーに親しんでいる
5	系列校の中学校でも日本語を必修科目として教えているので、予備教育としての意味合いもある

2. 小学6年生のみを対象とした理由

小学校1年生から5年生まで日本語学習をさせないのは、生徒たちは北京語と英語のほかに日本語も導入すると、言語学習間の言語干渉が起こる恐れがあるためである。言語の基礎力も身に付き、いわゆる外国語学習が12歳までという臨界説のちょうど1年か2年前の6年生こそ、第三外国語である日本語の学習を導入するのが最適だと考える

系列校の中学校の校長への聞き取り調査の内容を紹介する。日本語科目を中学1年から3年まで必修科目として取り入れた理由として、次の8点を挙げている。²¹

1	日本語を通して古今の知識を得る
2	香港における日本文化の高い受容度
3	カリキュラムに多様性を持たせること
4	豊富な学習リソース
5	英語に代わる外国語の紹介
6	異文化理解の促進
7	日本語を学ぶ際の学費の負担の軽減
8	将来に対する展望（仕事、留学等）

19 2012年10月12日に日本語担当の馬南教諭を介して電子メールで回答を得た。

20 2008年9月16日 順徳聯誼總會伍冕端小學劉煦元校長への対面式聞き取り調査。

21 2008年5月15日 順徳聯誼總會翁祐中學蔡澤群校長への対面式聞き取り調査。

宮崎 紀子：香港の初等教育機関における日本語教育の導入のための提言
—日本語を必修科目として取り入れている小学校の事例から得た示唆—

日本語科目導入の理由として両校に共通しているのは次の3点である。

1	英語や北京語に加えてもう一つの外国語の紹介
2	仕事や留学など将来に対する展望への期待
3	香港における日本文化の高い受容度

相違点は小学校では仮説ではあるが臨界期の問題を考慮に入れなければならないが、中学校では異文化間教育の一環としての実施でもあることが明らかになった。

5. カリキュラム^{22 23}

5.1 学習目標

小中一貫校を形成している中学校では中学1年生から3年生まで必修科目として日本語を学ぶので、「中学校での日本語コースの準備として基礎を作っておくこと」が大きな目標であり、具体的には以下の2点である。

1	日本語に対する生徒の興味を引き出し、日本語学習を続けたいと思ってもらうこと
2	ひらがな、簡単な文法や日常使用する語彙を習得し、自己紹介ができるようになること

5.2 対象学年及び人数

小学6年生全員が必修科目として日本語を学んでおり、2011-2012年度の人数は164人である。

5.3 授業時間（1サイクル及び年間）

1コマ30分で、一年間で34コマの授業がある。日本語の授業は1サイクル（5日間）に1回実施されている。

22 2011年7月15日 アンケート調査票の回収。回答者は順徳聯誼總會伍冕端小學日本語科目担当の馬南教諭。

23 2011年12月13日に順徳聯誼總會伍冕端小學日本語科目担当の馬南教諭への聞き取り調査を行い、学校案内や日本語コースの詳細について資料の提供を受けた。

5.4 使用教材

毎回、授業ではパワーポイントによるスライドをスクリーンで授業の最初から最後まで見せることが基本となっている。また、教科書とは別に、その日のスライドをA4の紙に小さく落とし込んだものを作製し、ハンドアウトとして配布している。授業で生徒が使用するものは、教科書、ハンドアウト、練習帳の3つである。教科書、ハンドアウト、生徒用の練習帳、中間及び期末試験問題など全て、講師の自作によるものである。

5.5 教科書の内容

第1課	あ行—あいうえお
第2課	か行—かきくけこ 日本という国名の由来、お正月
第3課	さ行—さしすせそ 端午の節句
第4課	た行—たちつと 雛祭り
第5課	な行—なにぬねの
第6課	は行—はひふへほ
第7課	ま行—まみむめも
第8課	や行—やゆよ ら行—らりるれろ
第9課	わ行—わをん
第10課	濁音、半濁音、拗音
文法	文法（一：～は～です・ではありません） 文法（二：～がすき・きらいです） 文法（三：～があります・ありません） 文法（四：～がいます・いません） 文法（五：数字（1－10まで）、今何時ですか、～時です、何人ですか、～人です
教室用語	起立、礼、先生 こんにちは、先生 おはようございます、みなさん こんにちは/おはようございます、着席、始めましょう、見てください、聞いてください、読んでください、答えてください、わかりましたか、はい わかりました、いいえ わかりません、静かにしてください、休憩しましょう、終わりにしましょう、先生 トイレへ行ってもいいですか
日常用語	おはようございます、こんにちは、こんばんは、さようなら、はじめまして、どうぞよろしくおねがいします、おやすみなさい、ってきます、ただいま、おかえりなさい、すみません、ごめんなさい、どうもありがとうございます、いただきます、ごちそうさまでした、がんばって、おめでとうございます
自己紹介	わたしは～です。小学校6年生です。～が大好きです。どうぞよろしくお願ひします。

各課の構成だが、例えば教科書の第1課では最初に「あいうえお」の表が提示され、ひらがな、カタカナとローマ字の発音が併記されている。その下に「あいうえお」のいずれかの音を含んだ単語が6つ縦に並べてある表があり、絵、ひらがな、漢字、ローマ字音、中国語訳が提示されている。以上で見開き2ページであり、これで一つの課となっている。

5.6 年間の授業スケジュール

2011-2012年度の授業スケジュールを以下に示す。

サイクル	教授内容・項目	学習重点項目
1		
2	あ行	語彙、日常用語 (1-4)
3	あ行	あ行の復習、ミニテスト、教室用語 (1-6)
4	か行	語彙、日常用語 (1-6)
5	か行	か行の復習、ミニテスト、教室用語 (1-10)
6	さ行	語彙、日常用語 (1-6)
7	さ行	さ行の復習、ミニテスト、教室用語(1-10)
8	た行	語彙、ミニテスト
9	復習、中間テスト1対策	あ行からた行の復習、日常用語 (1-6)、教室用語(1-10)、ミニテスト
10	中間テスト1	
11	な行	語彙、日常用語 (1-8)
12	な行	な行の復習、ミニテスト、教室用語 (1-13)
13	は行	語彙、日常用語 (1-12)
14	は行	は行の復習、ミニテスト、教室用語 (1-13)
15	ま行	語彙、日常用語 (1-16)
16	ま行	ま行の復習、ミニテスト、教室用語 (1-13)
17	や行	語彙、日常用語 (1-16)、教室用語 (1-13)
18	クリスマス休暇	
19	復習、期末テスト対策	あ行からや行の復習、日常用語 (1-16)、教室用語(1-13)
20	期末テスト	
21	ら行	語彙
22	旧正月休暇	
23	旧正月休暇	
24	わ行	語彙、ミニテスト

サイクル	教授内容・項目	学習重点項目
25	濁音・半濁音	語彙、ミニテスト
26	濁音・半濁音・拗音	語彙、ミニテスト、教室用語(1-18)
27	拗音、文法一	文型
28	文法一、文法二	文型
29	文法二、復習(あーわ行) 中間テスト2対策	文型、語彙、日常用語(1-17)、教室用語(1-18)
30	復習(あーわ行) 中間テスト2対策	語彙、日常用語(1-17)、教室用語(1-18)
31	中間テスト2	
32	イースター休暇	
33	イースター休暇	
34	文法三	文型
35	文法三、文法四	文型
36	文法四、文法五	文型
37	文法五、自己紹介	文型、自己紹介
38	自己紹介	自己紹介
39	復習	あ行からわ行の復習、日常用語(1-17)、教室用語(1-18)
40	復習	あ行からわ行の復習、日常用語(1-17)、教室用語(1-18)
41	復習、年度末テスト対策	あ行からわ行の復習、日常用語(1-17)、教室用語(1-18)
42	年度末テスト	

5.7 授業の実際

ある日の授業の流れを紹介する。²⁴

1	クラス全員が起立し、「先生、こんにちは」と日本語で言ってから、一礼し、着席する
2	講師はひらがなの清音表をスクリーンに提示して、広東語で説明を行う
3	日本の食文化の紹介をする。刺身や寿司の写真を見せ、それがどんなものか広東語で説明する
4	その日の主な学習項目の一つであるな行をスクリーンに提示し、「なにぬねの」の書き方の説明を行う
5	反復練習や代入練習を行い、な行の音や「なにぬねの」を含んだ単語の定着をはかる

24 2011年11月10日にを訪問し、順徳聯誼總會伍冕端小學日本語科目担当の馬南教諭の授業の参与観察を行った。

6	生徒用の練習帳を出してもらい、生徒はな行のひらがなを書く練習をする
7	は行に移る。は行に関しても4-6の同じ手順で説明や練習を行う
8	ビンゴゲームを行う。授業で扱ったな行とは行の単語（なつ、はな、さいふ等）をランダムに9つのボックスに各自埋めていってもらい。後は一般的なビンゴゲームの手順をそのまま行う。ビンゴを当てた生徒にはミニ・プレゼントを贈呈する
9	宿題の内容を教師が板書し、確認作業を行う
10	クラス全員が起立し、「先生、さようなら」と言って授業が終了する

5.8 評価方法

第一学期と二学期にそれぞれ1回ずつ中間試験があり、年間2回行っている。さらに第一学期に期末試験を1回、第二学期に年度末試験を1回実施している。試験内容は聴解と筆記である。年度末試験ではそれに加えて、口頭試験も実施している。学年の個人の総合成績の平均点に日本語科目の点数は入るが、政府の教育局に提出する書類には日本語の成績は含まれない。

5.9 日本文化紹介や交流活動などの実施状況

授業で日本のテレビ番組を紹介したり、食べ物、童謡、アニメ「どらえもん」のテーマソングなどを取り上げたりしている。また、Multi-intelligence Curriculum²⁵のコースの中でも日本語を趣味として学ぶコースがある。また、毎年、6月の年度の試験終了後の2週間に、Multi-intelligence Curriculumと相似した内容のコースを毎日1時間、午前中に実施している。日本のアニメや歌に親しむ内容となっている。

5.10 コースの特色^{26 27}

コースの特色について、A講師は次の2点を挙げた。

-
- 25 Multi-intelligence Curriculumとは、生徒の教養を深め、視野を広げるため、正規の科目の他に成績に関係がなく設けられたコースである。例えば、日本語、英語、フランス語、北京語、ピアノ、ダンス、バスケットボール、サッカー、卓球など多岐に渡る。
- 26 2011年7月15日 アンケート調査票の回収。回答者は順徳聯誼總會伍冕端小學日本語科目担当の馬南教諭。
- 27 2012年4月25日 順徳聯誼總會伍冕端小學日本語科目担当の馬南教諭より電子メールで回答を得た。

1	単語カードや日本語の童謡や日本語のアニメーションなどを使い、日本の文化を教えることで、日本語を学び、日本語に対する興味を持たせるように工夫している
2	簡単な日本語の文法を教えることによって、生活面でも活かして使えるようにしている。例えば、生徒たちは日本語のゲーム（Wii など）が好きで、簡単なゲームの言葉を理解できるようになることや、日本のテレビ番組を見る時、簡単な言葉が聞いてわかるようになること、また、日本へ旅行に行く時、簡単な会話ができるなどである

6. 小学校における望ましい日本語教師像^{28 29 30}

校長へ理想的な日本語教師の条件について聞き取り調査を行い、次の3点の回答を得た。

1	認可された日本語能力の資格があること。少なくとも 日本語能力試験の旧 4 級（現在の N5 に相当）合格者であること
2	教員免許を持つこと
3	認可された大学の学士の学位を持つこと

A 講師に対しても望ましい教師像について聞き取り調査を行い、以下の4点の回答を得た。

1	日本語に対して、基本的な知識及び運用能力を持つこと
2	日本の文化に対して、ある程度の知識と興味を持っていること
3	公立小学校の教師としての仕事は日本語を教えることだけではないため、香港の方が優先される
4	日本語能力試験旧 4 級（現在の N5 に相当）に合格していること

両者に共通しているのは、以下の2点である。

1	小学校教師としての資格を有すること
2	日本語能力試験旧 4 級（現在の N5 に相当）に合格していること

28 2011 年 7 月 15 日 アンケート調査票の回収。回答者は順徳聯誼總會伍冕端小學日本語科目担当の馬南教諭。

29 2012 年 4 月 25 日 順徳聯誼總會伍冕端小學日本語科目担当の馬南教諭より電子メールで回答を得た。

30 2012 年 10 月 26 日 順徳聯誼總會伍冕端小學劉煦元校長への聞き取り調査を行い電子メールで回答を得た。

7. 2004年以降日本語教育を継続して来られた要因

対象校が2004年から8年間継続して正規科目として日本語教育を実施して来られた要因について校長へ聞き取り調査を行い、次の4点の回答を得た。³¹

1	2001年に設立された新しい学校で、伝統的な規範がなく、日本語科目の導入という創造的で新しいことができた
2	日本語の基礎能力のある教師を持つこと
3	当校が置かれている地域は香港では裕福な地域ではない。保護者は当校における日本語という第三外国語の学習はインターナショナル・スクールの生徒の第三外国語の学習と同じという認識から支持を得ていること
4	系列の中学校にも日本語科目があることで、学生の持続的な日本語学習に有利であること

また、校長は「しかしながら、当校の日本語課程はまだ発展途上であると考えている」とも述べている。保護者の反応については2008年に行った調査³²でも、校長は「保護者の方々は日本語を学べる事を高く評価している。将来、子供が日本に住んだり、日本で働いたりできるという期待もある。日本語学習について肯定的な意見である。」と語っている。

8. なぜ香港の初等教育機関において実施校が少ないか

校長は香港において日本語教育を実施していく難しさを次のように指摘している。「香港において実施校が少ないのは教育局のカリキュラムガイドラインにより、日本語が必修科目ではない上、教師も不足しているからである。当校では入門日本語を教えているが、将来に渡って日本語の学習が持続できるように正規の日本語教育を提供したいのだが、教育の予算が限られていて、日本語教育は英語と北京語の後に回されているのが現状だ。ただ、我が校の日本語のプログラムは系列校の中学校へと繋がっていくものであり、生徒にも系列の中学校での日本語学習の継続を望んでいる。個人の見解だが、香港の小学校で日本語教育を実施するのは難しいと思う。なぜなら、日本語は必修科目ではなく、教育局から助成金が受けられないので、日本語教育向けの予算は厳しい。また、日本語を指導できる教師の不足もその要因の一つである。

31 2012年10月26日 順徳聯誼總會伍冕端小學劉煦元校長への聞き取り調査を行い電子メールで回答を得た。

32 2008年9月16日 順徳聯誼總會伍冕端小學劉煦元校長への対面式聞き取り調査。

その他、日本語は言語道具として英語と比べて国際性が低く、香港の小学校では英語ほど重要な科目として扱われていない^{33A} 講師も「日本語教育は初等教育では課外活動という形でいいだろう。正規教育には十分な数の教師そしてその教材が不可欠だから³⁴という声を寄せている。

石井（2006）³⁵は「子どもの生活に関わる言語の全体を捉えることによって、日本語の役割が見える」と述べている。また、石（1996）³⁶は「香港は中国華南地区広東省に隣接した地域であり、本来の住民の大半は中国語の一方言である広東語を母語としているが、周知の通り英国植民地として発展してきた関係上、英語は単なる外国語ではなく公用語でもあるため、英語教育は香港における学校教育のもっとも重要な地位を占めてきた。－（中略）－香港が今日の経済的地位を築けたのは英語世界と中国語世界の接点として、英語に堪能な多数の中国人を擁するからであり、香港自体の将来を考えれば、現状の英語に重点を置いた教育が継続されることが望ましいだろう」と指摘する。Chan（2002）

³⁷は香港社会における外国語の市場価値を調査し、第1位に英語、第2位到北京語、第3位が日本語であるという結果を得た。さらに、香港人にとって広東語は母語であり、英語は第2言語であるというのも否めないという前提の上に、第三言語として学びたい外国語を調査した。結果は1位が北京語、2位が日本語であった。そして、香港は返還後中国と切っても切れない関係であるため、北京語が重要性の高い言語であると認識されていると結論付けた。香港社会においては日本語は広東語、英語、北京語に次ぐ第四言語としての地位にあるのが現状であり、調査対象校の校長が指摘するように予算の問題や人的リソースの確保などカリキュラムの中に導入するためにはいくつかの課題があると言える。

33 2012年10月22日及び26日に順徳聯誼總會伍冕端小學劉煦元校長への聞き取り調査を行い電子メールで回答を得た。

34 2012年10月22日 順徳聯誼總會伍冕端小學日本語科目担当の馬南教諭への聞き取り調査を行い電子メールで回答を得た。

35 石井恵理子(2006)『年少者日本語教育の構築に向けて－子どもの成長を支える言語教育として－』『日本語教育』第128号 日本語教育学会：5-6

36 石秋炯(1996)「香港における外国語教育の中の日本語教育」『世界の日本語教育』第4号国際交流基金日本語国際センター：73-74

37 Mina Chan (2002)「香港における日本語の市場価値」『日本学刊』第6号 香港日本語教育研究会：140-142

9. 小学生を対象とした日本語教育推進のための提言

日本語学習センターが発表した学習時間数の比較データによると、N5（旧4級に相当）の受験において、漢字圏の学習者の平均学習時間は200–300時間である。³⁸日本語能力試験の基準だが、旧4級は「初歩的な文法・漢字（100字程度）・語彙（800語程度）を習得。簡単な会話ができ、平易な文、又は短い文章が読み書きできる能力。150時間程度学習し、初級コース前半を修了したレベル」とされていたが、現役の小学校教師に日本語の学習の機会を持ってもらうように推奨することは時間的かつ経済的な負担を考えた場合、可能なことではないかと考察する。そこで、次のように提案したい。①現役の小学校教師に日本語能力試験のN5（旧4級）レベルの日本語学習の機会を提供する②教授法についてはN5に合格した小学校教師を対象にNPO 香港日本語教育研究会などが研修を行う③将来、小学校教師の職に就く可能性がある大学生に日本語学習の場を紹介する④小学校で日本語を教えている教師のネットワーク化を図ることの4点である。

また、講師の派遣という形で小学校で日本語教育を行う民間の語学学校の活用も挙げられるだろう。亀島（2010）³⁹は香港のある小学校での試みを報告しており、子どもを教える上でのポイントを5点挙げている。①レッスンプランは時間に余裕を持って組み立てること②パワーポイントに頼りすぎないこと③子どもたちの五感を刺激すること④ご褒美も時には使うこと⑤同じパターンで行う練習は5分以内にするこゝである。また、派遣先の教師がアシスタントティーチャーとしてクラスに関わったことが、クラス・マネジメントの上で大きな助けになったと述べている。派遣元と派遣先の講師がコミュニケーションを取り、協同でコース運営に当たることがより良い学習の場を提供できることにつながると考える。

10. おわりに

本稿では必修科目として日本語を取り入れている小学校を対象に様々な角度から調査を試みた。小学校における一つの望ましい日本語教師像は香港の教員資格を持ち、

38 「日本語学習センター」〈<http://www.studytoday.com/JLPT.asp?lang=JP>〉（2012年10月27日）

39 亀島裕美（2010）「日本語教育の現場から～子供に教える～」『日本学刊』第13号 香港日本語教育研究会：190–193

日本語能力試験 N5 に合格していることという示唆が得られた。初等教育での日本語教育の実施においては、成人教育とは異なり、香港政府の教育政策に左右される面が強く、また保護者の理解なども重要になる。香港における初等日本語教育はまだ黎明期の段階にあり、NPO 香港日本語教育研究会など日本語教育関連諸機関や日本文化関連諸団体などの積極的な関与が必要であると考ええる。

宮崎 紀子：香港の初等教育機関における日本語教育の導入のための提言
—日本語を必修科目として取り入れている小学校の事例から得た示唆—

参考文献

- 「順徳聯誼總會伍冕端小學 S. T. F. A Wu Mien Tuen Primary School The 10th ANNIVERSARY 2001-2010」学校案内”：28-29
- 宮崎紀子（2009）「香港の初等教育における日本語教育の現状—小学校と語学学校との比較を通して」『アジア太平洋地域における日本語教育』第8回国際日本研究・日本語教育シンポジウム実行委員会：189
- 石井敏・久米昭元・遠山淳編著『異文化間コミュニケーションの理論—新しいパラダイムを求めて』有斐閣ブックス：189-200
- 中島平三・外池滋生編著『言語学への招待』大修館書店：181, 213
- レスリー・M・ビービ編 卯城祐司・佐久間康之訳『第二言語習得の研究』大修館書店：10-12
- ロッド・エリス著 牧野高吉訳『第2言語習得の基礎』ニューカレントインターナショナル：99-100, 301-302
- 石秋炯(1996)「香港における外国語教育の中の日本語教育」『世界の日本語教育』第4号国際交流基金日本語国際センター：73-74
- 宮副ウオン裕子ほか（2005）「香港の中等日本語教育における最近の動向」『日本学刊』第9号 香港日本語教育研究会：138-139
- 『海外の日本語教育の現状＝日本語教育機関調査＝1993年』国際交流基金日本語センター
- 石井恵理子(2006)『年少者日本語教育の構築に向けて—子どもの成長を支える言語教育として—』『日本語教育』第128号 日本語教育学会：5-6
- 亀島裕美（2010）「日本語教育の現場から～子供に教える～」『日本学刊』第13号 香港日本語教育研究会：190-193
- Mina Chan（2002）「香港における日本語の市場価値」『日本学刊』第6号 香港日本語教育研究会：140-142
- 国際交流基金『日本語教育機関調査：2009年海外の日本語教育の現状』
<http://www.jpfi.go.jp/j/japanese/survey/result/index.html> (2012年10月24日)
- 国際交流基金「日本語教育国・地域別情報<香港>」(2012年10月24日)
(<http://www.jpfi.go.jp/j/japanese/survey/country/2011/hongkong.html#JISSHI>)
- 小學概覽 2011<http://www.chsc.hk/psp/main.php?lang_id=2> (2011年9月5日)
- 小學概覽 2012<http://www.chsc.hk/psp2012/main.php?lang_id=2> (2012年10月30日)
- 「日本語学習センター」<<http://www.studytoday.com/JLPT.asp?lang=JP>>
(2012年10月27日)

資料 アンケート調査票

1. 學校的概要

①學校名稱

②成立年份

③簡單的學校的歷史

④學校規模 a. 學生總數, b. 按學年學生數

⑤一學年之內舉辦多少次有關課程 (1 個課程有多長)

⑥教師 a. 日語母語教師數,
b. 非日語母語教師數,
c. 校內僱用講師還是從校外招聘的派遣講師

⑦課程 a. 對象學年及人數,
b. 授課時間 (1 個課程及整學年),
c. 使用教材 (a. 教科書, b. 副教材 c. 其他等),
d. 學習目標,
e. 課外活動(日本文化之介紹和交流活動等) 的實施狀況

2. 課程的特色

3. 採用教師時的注意點 (對教師期望)